

歌集『あかね雲』より (一五)

登美子

髪に紅き葉刺してペダル踏む

彼の子も今日は会釈して行く

歎異抄唱えしわが目に

窓外の雪降り初むが心乱れぬ

耳遠くなりしか友は

法話聞く席を講師の前に移せり

小春日に川辺で休みしわが姿を

老いの痴呆と間違いられたり

賜りし貴女も今は逝かれしを

紅き花色今も変らじ

太すぎし今年の大根漬けられず

物には加減というものありや

孟蘭盆に届け下されしともしびを

仏のご縁と時かけて読む

治るかと問いたるわれに冷たくも

完治は無理と医師は告げたり

残暑に堪木犀の咲き初む夕方に

犬のアーサーは眼を閉じてしまえり

里川に帽子飛ばして泣きし日を

昨日のごとく思い出しおり

此の春も小川に増えし目高にも

好みあるらしグループ作れり

万物の嘆き悲しむ捏槃図の

象の姿に一人哀れむ

実る日を見たしと願いて植えし蜜柑

六年過ぎて初也を食む

日常を静かに暮らすを繰り返す

それが小さな幸せなるか

女郎花そよぐ河原辺

韋駄天に走る夢みて今朝も足揉む

伊吹野の薄が原を見え隠れ

赤きスポーツカーうねうねといく

夫婦とて禁句のありや春火燵

行きづりの人にも会釈げんげ道

人垣を分けて進む夫無視し

露店見ながら多賀に詣でぬ

背の順に並びて登校する児等の

前の旗持ち今朝もおじぎす

大樫の根に傾く

四百年守り来し墓直してもらいぬ

孫と来る公園行きの縄電車

菫に停車し蓮華に下車す

堂前の落ち葉踏む音高くして

リズム合わせて歌を歌いつ

雪降れど満月の夜は巡り来て

細き雪間を一筋に光る

バス待つに近くの書店をのぞき見る

いつしか奥の歌の本買う

伊吹峯に二度目の雪来て

三度目は里雪となると大根堀りぬ

寒朝に大根掘れば音立てて

大きく二つにひび割れてしまう

新しき冬靴履きてはにかみて

笑顔湛^{たえ}えて友と逢いおり